

- (36) Cf. F. Mußner 「ガラ 2:16 の文脈に基づけば、なによりも *Ἰουδαϊζέειν* と関連付けられた「業」が考えられている」(*Der Galaterbrief*, HThKNT (Freiburg/Basel/Wien: Herder, 4 Aufl, 1981) 169)。
- (37) 「キリストの信義」の属格は主格的属格である(拙論「ガラテヤ人への手紙における ΠΙΣΤΙΣ とキリスト」『聖書の宗教とその周辺 佐藤研教授・月本昭男教授・守屋彰夫教授献呈論文集』聖書学論集 46、日本聖書学研究所、2014 年、653-76 頁参照)。
- (38) この移行は救済史及びそこで生じたキリストの十字架における死という出来事に基づく。Moo が正しく主張するように、「キリストの十字架が人間の歴史及びキリスト者各々の歴史に「転機」をもたらしたのであり、あらゆるものが再構成されざるをえない中心となった」(“Justification in Galatians,” in *Understanding the Times: New Testament Studies in the 21st Century: Essays in Honor of D. A. Carson on the Occasion of his 65th Birthday*, ed. Andreas J. Kötenberger and Robert W. Yarbrough (Wheaton: Crossway, 2011) 160-95, here 179)。
- (39) 前置詞の相違から、16 節 a では「法の業」と「キリストの信義」は対立してはいない。Boer (*Galatians*, 144) 及び F. Vouga (*An die Galater*, 58) も同様。他方、佐竹明「ガラテヤ人への手紙」(新教出版社、1974 年) 215 頁や T. R. Schreiner, *Galatians*, ZECNT 9 (Grand Rapids: Zondervan, 2010) 158 などは前置詞の相違はそれほど重要ではないと考える。H. Schlier は留保付きではあるが、「前置詞が変わることで本質的な相違は強調されていない」と語る(*Der Brief an die Galater*, KEK 7 (Göttingen: Vandernhoeck & Ruprecht, 13 Aufl, 1965) 92)。
- (40) Cf. B. M. Fanning 「クライマックス相動詞 CLIMAXES と共に現れるアオリスト相は、それに先行する動作を考慮せずに瞬間的なクライマックスに焦点を当てる。変化の瞬間のみを示し、アプローチの段階は除く。従って、アオリストと共に用いられた場合、クライマックス動詞は瞬時相動詞 PUNCTUALS と同じ意味であり、瞬間において動作が完全に生じたことを意味する」(*Verbal Aspect in New Testament Greek* (Oxford: Clarendon Press, 1990) 158f.)。
- (41) Cf. D. J. Lull, “‘The Law was Our Pedagogue’: A Study in Galatians 3:19-25,” *JBL* 105/3 (1986) 481-498.
- (42) T. L. Donaldson, “The ‘Curse of the Law’ and the Inclusion of the Gentiles: Galatians 3.13-14,” *NTS* 32 (1986) 94-112, here 102.
- (43) 佐竹は、更に歩を進めて、「共に十字架につけられる」は「おそらく元来は洗礼に由来する表現であろう」と考えている(『ガラテヤ人』233 頁)。
- (44) 大貫隆『イエスの時』岩波書店、2006 年、160 頁。
- (45) E.g. Schlier, *Der Brief an die Galater*, 94; Mußner, *Der Galaterbrief*, 173f.; Räisänen, “Galatians 2.16 and Paul’s Break with Judaism,” *NTS* 31 (1985) 543-53, here 545.

## 排除か？ 共棲か？

### ——Ⅱテサロニケ書の執筆意図をめぐって——<sup>(1)</sup>

辻 学

#### 序 問題の所在

Ⅱテサロニケ書に関する最も大きな問題の一つは、この「第2」書簡が書かれた目的は何かということである。とくに、Ⅰテサロニケ書との関係をどう理解するのかということが、解釈者の関心の的となってきた<sup>(2)</sup>。

Ⅱテサロニケ書の執筆意図については、A. リンデマンの提示した仮説に対する賛否が大きな議論の的となってきた。リンデマンは、通説に反対してこう主張する——Ⅱテサロニケ書の著者は、Ⅰテサロニケ書の叙述(とくに「主の日」の到来をめぐる 4:13-5:11)に対する誤解を修正する補完的な「第2」書簡を提示しようとしている<sup>(3)</sup>のではなく、Ⅰテサロニケ書を偽書扱いして退けようとしているのである(=「排除説」)。

リンデマンは、自説の典拠としてⅡテサロニケ 2:2 と 3:17 を挙げる。すなわち、2:2 が批判している「私たちに由るといふ手紙」(δι' ἐπιστολῆς ὡς δι' ἡμῶν) とは、Ⅰテサロニケ書以外にあり得ない。また 3:17 は、真筆性の証しとしてのパウロ手紙からの挨拶を「すべての手紙にあるしるし」だとしているが、これは、その「しるし」を欠くⅠテサロニケ書を間接的に偽書扱いしていることになる。他方、2:15 に出てくる、手紙の受信者たちが守るべき教えを伝えた「私たちの手紙」とはⅡテサロニケ書自身を指しているという<sup>(4)</sup>。この仮説はすでに A. ヒルゲンフェルトや H. J. ホルツマンが 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて唱えていたものの、その

後支持されなくなっていたのだが、リンデマンがこれを「再興」させて以後、再び支持者が増え、それに応じて議論も活発化するに至った<sup>(5)</sup>。

この「排除説」に対しては、次のような反論がなされている。

(1) Iテサロニケ書に大きく文献依存しているという事実は、IIテサロニケ書の著者がIテサロニケ書の真正性を確信していることを示している<sup>(6)</sup>。また、これだけIテサロニケ書に強く依存している以上、Iテサロニケ書が偽書だということになれば、IIテサロニケ書もまた偽書と見られてしまう危険性があつたはずである<sup>(7)</sup>。

(2) 2:15はIテサロニケ書を指しており、著者がIテサロニケ書の真正性を承認していることを示している<sup>(8)</sup>。

(3) IIテサロニケ書はむしろ、Iテサロニケ書の「補足的注釈」ないし「読み方の手引き」(Leseanweisung, reading instruction)として書かれている<sup>(9)</sup>。

そこで、この議論の対象となっている、IIテサロニケ2:2, 15; 3:17の3箇所を検証することによって、IIテサロニケ書の執筆意図を見定めようというのが我々の課題である。なお、この問題については既に一度論じたことがあるのだが、ここでは2:15を十分考慮に入れておらず、考察が十分とは言えなかった<sup>(10)</sup>。また、その後もこの問題に関する論考が続けて出されているので、それらをも考慮に入れて議論を整理したいと思う<sup>(11)</sup>。

両テサロニケ書の関係をめぐるとこの議論が分かれる大きな要因の一つは、IIテサロニケ書自体の中に、Iテサロニケ書への明確な言及がないということである。したがって、この点をうまく説明できる仮説が、より強い説得力を持つことになるであろう。

なお、両書簡の関係を論じる際には、IIテサロニケ書がパウロの真筆なのか偽書なのかという点が重要な役割を果たす。しかしIIテサロニケ書の著者問題については、いまだに意見が分かれている状態である。それゆえ、著者問題を予備的に論じてから、本論に入りたい。

## 1. 予備的考察：IIテサロニケ書の著者問題

IIテサロニケ書の著者問題については、英語圏とドイツ語圏ではほぼ綺麗に意見が分かれる<sup>(12)</sup>。ほとんどの場合、真筆性を擁護するのは英語圏の学者で<sup>(13)</sup>、偽書だとするのはドイツ語圏の学者である<sup>(14)</sup>。

だが、以下の点から考えて、IIテサロニケ書がパウロの真筆である可能性はまず考えられない。

(1) 言葉づかいの共通性と相違点：IIテサロニケ書の全体にわたって、Iテサロニケ書の言葉づかいが反映していることはよく知られている<sup>(15)</sup>。ただし、両書簡に見られる言葉づかいの共通性を指摘すること自体は、どちらの論拠にもなり得るゆえ、あまり重要とは言えない。とはいえ、そもそもパウロ自身がIIテサロニケ書を、Iテサロニケ書に対する誤解を解くために書いたのだとしたら、Iテサロニケ書の言葉づかいを巧妙に真似るだけで、誤解が生じたその内容を詳しく説明しないというのは理解しがたい<sup>(16)</sup>。さらに、IIテサロニケ書の中心部とも言える、終末の到来をめぐる教を展開している(しかも内容上Iテサ4:15-5:11と密接な関係がある)2:1-12に、Iテサロニケ書と共通する言葉づかいが見られないという事実は、真筆だとすると奇妙である。同じく終末論に関わっている1:5-10でもIテサロニケ書との語句上の対応はない<sup>(17)</sup>。

むしろ重要なのは相違点の方で、決定的なのは、Iテサロニケ書における「神」がIIテサロニケ書では「主」と言い換えられていることである(例、Iテサ1:4「神に愛されている兄弟たち」→IIテサ2:13「主に愛されている兄弟たち」、Iテサ5:23「平和の神」→IIテサ3:16「平和の主」。他にもIテサ5:24//IIテサ3:3、Iテサ3:11//IIテサ2:16-17; 3:5など)<sup>(18)</sup>。この違いは、パウロの真筆という仮定の下では説明が極めて難しい。

(2) 内容上の相違：両書簡の終末論を調和させようとする種々の試みにもかかわらず<sup>(19)</sup>、両者が持っている相違はやはり見過ごせない(Iテサ4:15-5:11; IIテサ2:3-12)。「主の日」は突然来るのであり、しかもそれは、パウロの生前に来る(4:15)

と確信を持って述べている I テサロニケ書と、「主の日」が来る前には定められた出来事が起こるのだが、それはまだ起こっていないと述べる II テサロニケ書との間には明らかに齟齬がある。ムラトリ正典表 (2 世紀後半) が、II テサロニケ書は I テサロニケ書の「矯正のために」(pro correptione) 書かれたと説明しているのも、両者の主張が矛盾するという認識ゆえであろう<sup>94</sup>。一方が他方の修正ないし補完としてパウロ自身により書かれたものだとしたら、パウロがそのことに言及しないのはどう考えてもおかしい (I コリ 5:9-13; II コリ 7:8-13 参照)<sup>95</sup>。

(3) 状況設定: II テサロニケ書が、真筆論者たちの言うように、I テサロニケ書から間もない時期に書かれたとすると、両書簡の状況設定に辻褄の合わない事柄が出てくる。① I テサロニケ書で繰り返されている、再会の希望 (2:17-28; 3:6, 10) が、II テサロニケ書では全く見られない<sup>96</sup>。②パウロがテサロニケにいた時に直接語った事柄についての言及はあるのに (1:10; 2:5, 15; 3:7, 10)、I テサロニケ書への明確な言及はない。③ 3:2 はパウロが何らかの緊張状態にあることを示唆するが、I テサロニケ書にはその主題は現れない。使徒 18:1-11 にもそのような状況の描写はない<sup>97</sup>。④両書簡がパウロの初期書簡だとすると、その当時に擬似パウロ書簡が出回っていたこと (II テサ 3:17 の前提状況) は考えられない。偽名書簡は、「著者」の知名度や権威を前提としているからである<sup>98</sup>。⑤パウロ自身が 3:17 の「真正保証」を I テサロニケ書の直後に書いたのだとすれば、同じ受取人に向けて書いた I テサロニケ書にそれが無いことの説明があつて然るべき<sup>99</sup>。⑥ 2:5 が言うように、終末の遅延をパウロがすでに口頭で告げていたのだとしたら、I テサロニケ書を送ることは不要だっただろうし、口頭での宣教内容とも矛盾することになる (が、その説明は I テサロニケ書にはない)<sup>100</sup>。

以上の点からして、II テサロニケ書がパウロの真筆である可能性はほとんどない。I テサロニケ書と言葉づかいは (奇妙な仕方) で対応しているのに、両者の関係についての説明はないというような手紙をパウロ自身が書いたとは考えられないからである。また、パウロ自身が II テサロニケ書の方を先に書いた<sup>101</sup>可能性も考えられない。ならば I テサロニケ書の方に、II テサロニケ書の内容への関連づけや言及がないとおかしいからである。

## 2. II テサロニケ書の執筆意図

上記の考察を踏まえて、以下では II テサロニケ書を偽名書簡と見なした上で、その執筆意図を探ることとする。

冒頭で述べた 3 箇所の検証に当たっては、I テサロニケ書と II テサロニケ書と一緒に読まれる (あるいは、I テサロニケ書の内容を念頭に置いた上で II テサロニケ書が読まれる) ことに十分留意する必要がある。すなわち、II テサロニケ書を読むことで、I テサロニケ書がどう理解されるかという間テクスト的關係が重要なのである<sup>102</sup>。その際とくに問題となるのは、II テサロニケ書が I テサロニケ書にはっきりとは言及していないという事実 (上述) をどう説明するかということである。

### (1) II テサロニケ 2:2

2:2 において著者は、「主の日は差し迫っている」<sup>103</sup>という誤った終末論的メッセージを退けているが、そのメッセージは「霊を通して、あるいは言葉を通して、あるいは私たちによるという手紙を通して」(μήτε διὰ πνεύματος μήτε διὰ λόγου μήτε δι' ἐπιστολῆς ὡς δι' ἡμῶν) 読者に伝えられたものだという。

「私たちによるという」(ὡς δι' ἡμῶν) が、「手紙」だけでなく「霊」と「言葉」にもかかるのかどうかについては議論が分かれている<sup>104</sup>。構文が曖昧なため、いずれの可能性もあるのだが、「私たちによるという霊」は理解が困難なので、「言葉」と「手紙」の 2 つ<sup>105</sup>、あるいは「手紙」だけにかかる<sup>106</sup>と考えるのが妥当であろう。私見では、2:15 の「私たちの言葉ないし手紙」(εἴτε διὰ λόγου εἴτε δι' ἐπιστολῆς ἡμῶν) という表現との並行性を考慮すると (後述)、ここでも「言葉」と「手紙」の両方を考えている蓋然性が高い。

「私たちによるという、ある手紙」(δι' ἐπιστολῆς ὡς δι' ἡμῶν. 「手紙」は冠詞なし、単数形) という表現は、形式からしても内容からしても I テサロニケ書を想起させる。「主の日」(I テサ 5:2 参照) という表現は I テサ 5:24 と対応し

ているし(2節「盗人が夜来るように主の日は来る」。このような形で「主の日」の接近について語る箇所は、他のパウロ書簡および第二パウロ書簡にはない)、「私たちによる」という表現が、同じ発信者(パウロ、シルワノ、テモテ)であるIテサロニケ書をも十分に連想させること<sup>64</sup>からして、他の書簡を示唆している可能性は考えにくい。

問題は、ここで著者がはっきりIテサロニケ書を名指ししてはいないということにある。本当にIテサロニケ書を偽物扱いするつもりなら、もっとはっきり名指しする必要があったのではないだろうか<sup>65</sup>。しかし2:2はまるで、Iテサロニケ書ではない、別の「(偽)<sup>64</sup>テサロニケ宛書簡」を指しているかのような表現になっている(現実には、そのような書簡が存在したとは考えられないし、その証拠もない)。この曖昧な表現は、著者の戦略と見ることができる。すなわち著者は、Iテサロニケ書の終末論を直接批判するのではなく、類似の内容を持った別の手紙を指しているかのような書き方をすることで<sup>66</sup>、Iテサロニケ書との「直接勝負」を避けた。それは、パウロの死後に突然現れたこの書簡が、すでに広く認知されているIテサロニケ書と対立する発言をしているせいで偽書の疑いを(事実そうなのだが)容易に招いてしまう危険を避けるためであったに違いない<sup>67</sup>。

こうして読者は、Iテサロニケ書の内容をIIテサロニケ書というレンズを通して読むことになる。すなわち、両書簡が矛盾していると思えずことなく、Iテサ4:13-5:6に基づいて終末が「差し迫っている」と解するのは誤りだと理解するに至る。このようにしてIIテサロニケ書の著者は、偽造の疑いを避けつつ、Iテサロニケ書の終末論を書き換えたのである。

## (2) IIテサロニケ2:15

「主の日」(2:2)到来時の出来事とその遅延(2:5, 7参照)について述べた後、著者は「私たちの言葉によって、ないし手紙によって」(εἴτε διὰ λόγου εἴτε δι' ἐπιστολῆς ἡμῶν) 教えられた伝承を固く守るようにと受取人に命じている。上述したように、この表現は、「私たちによるという言葉や手紙」(2:2)との対応関係を意識したものであろう(ただし2:2と違って「霊」への言及はない)。

ここで挙げられている「私たちの手紙」(δι' ἐπιστολῆς ἡμῶν) が具体的にどの書簡を指すのかについては、意見が分かれている。①Iテサロニケ書。この表現は2:2との対比になっており、2:2では擬似書簡、2:15では真正書簡を指している。著者が知っている真正書簡はIテサロニケ書だけ<sup>68</sup>。②IIテサロニケ書自身。著者は他のパウロ書簡に(おそらく知っていながら)全く言及していない。3:14「この手紙を通して(διὰ τῆς ἐπιστολῆς)」と同様、読者が従うべきはこのIIテサロニケ書の内容だとされている<sup>69</sup>。③パウロ書簡全般。「私たちの言葉と手紙を通して」という仕方、口頭および文書で伝わる、信仰の伝承的性格が強調されている<sup>70</sup>。

私見では、②(IIテサロニケ書自身)は考えにくい。もしIIテサロニケ書自体を指しているなら、3:14(「この手紙を通して διὰ τῆς ἐπιστολῆς」)と同じような表現が期待されるであろう。さらに、「私たちの言葉や手紙を通してあなたがたが教えられた伝承」のうち「言葉」は、パウロがテサロニケにいた時に語った言葉(2:5)を指している。とすれば「手紙」も、パウロ書簡全般というよりも、過去にテサロニケの人々宛に書かれたものを指していると考えるのが自然である。したがって、3つの選択肢の中では①(Iテサロニケ書)の可能性が最も高いと言えよう。

読者は間違いなく、まずIテサロニケ書を思い出したはずである。だが、Iテサロニケ書を指しているのなら、もっと明瞭な表現ができたのではないだろうか(例、Iコリ5:9「あなたがたに私は手紙の中で……と書いた」)。「私たちの言葉や手紙を通して」といういささか漠然とした表現は、2:2で示唆している偽書とはまた別の、(IIテサ2:3-12の語る終末論と合致する内容を述べた)「(真正)テサロニケ宛書簡」が存在した可能性を示唆する<sup>71</sup>。「言葉」が、特定の教えではなく、テサロニケにおいてパウロが語った教え全体を意味しているのと同様、「手紙」は、パウロがテサロニケ教会に宛てて送った教えを包括的に指しているともできるわけである<sup>72</sup>。その場合、Iテサロニケ書は「手紙」の中に含まれるが、その一部でしかないことになる。

こうして読者は再び、IIテサロニケ書によってIテサロニケ書を解釈するよう

誘導される。すなわち、パウロの「真の終末論」はこのⅡテサロニケ書で語られている事柄(2:3-12)であり、それは口頭でも(Ⅰテサロニケ書を含む一連の)書簡でも以前から告げられていたことなのだとして理解することになる。こうして著者は再び、Ⅰテサロニケ書そのものと直接対峙することなく、その内容を書き換えているのである。

### (3) Ⅱテサロニケ 3:17

手紙の結びで著者は、パウロが直筆で挨拶を書き加える(それまでは口述筆記)という、真正パウロ書簡に見られる慣習を真似ている——「この挨拶は、パウロの自分自身の手による」(ὁ ἀσπισμὸς τῆ ἐμῆ χειρὶ Παύλου)。この表現は、Ⅰコリ 16:21 およびコロ 4:18 と逐語的に一致している<sup>64</sup>。さらにガラ 6:11 (ἔγραψα τῆ ἐμῆ χειρὶ) およびフィレ 19 (ἐγὼ Παῦλος ἔγραψα τῆ ἐμῆ χειρὶ) のこともⅡテサロニケ書の著者は知っていたはずである。そうでないと、「これは、すべての手紙にあるしるしである。私はこのように書く」が真筆保証にならず、かえって疑惑の種となってしまう。

しかし、この記述を額面通りに受け取る必要はない。例えば、ローマ書にこの「しるし」がないからといって、その真筆性が疑われたとは思われぬし、その証拠もない。著者もそのような意図は持っていなかったはずで、これはⅡテサロニケ書の真筆性を強調するための一種の誇張と捉えるべきであろう<sup>65</sup>。そうだとすれば、Ⅰテサロニケ書についても同じ事が言える。実際、Ⅰテサロニケ書の真筆性がこの箇所ので疑われることは、「排除説」の登場以前には) なかったのである。

私見では、3:17 には別の機能がある。すなわち著者は、この叙述によってⅠテサロニケ書とⅡテサロニケ書との時間的な距離を作り出そうとしたのである。「これは、すべての手紙にあるしるしである」という表現は、この手紙がパウロの宣教活動の終わり頃に書かれたことを示唆している。Ⅱテサロニケ書執筆の時点では、すでにパウロ書簡が数多く出回っており、加えて偽書も登場していた(2:2 参照)。それゆえ本物と偽物を区別するためにこのような「しるし」を書くことにし

始めた、というフィクションがこの箇所背後には存在するからである(それならば、この「しるし」がないパウロ書簡が存在することも読者は納得できる)<sup>66</sup>。

こうして著者はⅡテサロニケ書を、テサロニケ教会とパウロとの一連のやり取りにおける「最終回答」として提示する。パウロの教え全体は、最後に書かれたこの手紙に記されている内容に従って理解されるべきなのである——Ⅰテサロニケ書の終末論もその例外ではない。ここでもやはり読者は、Ⅰテサロニケ書の内容をⅡテサロニケ書に沿って理解するよう暗に促されている。

## 3. 結 論

(1) Ⅰテサロニケ書とⅡテサロニケ書との間には、言葉づかいの点でも神学思想的な点でも見過ごせない相違があり、パウロ自身がこの「第2」書簡を著したとは考えられない。Ⅰテサロニケ書の文体や言葉づかいを真似てはいるが、両書簡の関連は説明しないというような手紙をパウロが書いたはずはなく、Ⅱテサロニケ書は明らかに擬似パウロ書簡である。

(2) Ⅱテサロニケ書は、Ⅰテサロニケ書を偽書扱いして排除しようとしているわけではないが、しかし自らをⅠテサロニケ書の補足的注釈ないし「読み方の手引き」として提示しているわけでもない。著者の戦略はむしろ、Ⅰテサロニケ書の終末論的教説を、Ⅰテサロニケ書そのものを直接批判することなしに「上書き」というものであった。2:2 で著者は、「主の日」の切迫を語る別の偽名書簡を批判しているかのような体裁を採りつつ、実際にはⅠテサ 4:13-5:11 の内容を批判的に書き換えている。ついで 2:15 では、パウロの本当の教えはこの手紙に記されている内容であり、それはパウロがテサロニケ教会に口頭で、また(Ⅰテサロニケ書を含む複数の)手紙を通して伝えた事柄と一致するものだと述べることによって、Ⅰテサロニケ書をⅡテサロニケ書と調和する形で解釈するよう読者を誘導している。そして 3:17 では、Ⅱテサロニケ書をパウロの晩年に書かれた手紙、すなわちテサロニケ教会との一連のやり取りの「最終回答」として提示することで、この書簡の正当性を強調する。

(3) したがってⅡテサロニケ書の著者は、Ⅰテサロニケ書との「共棲」を図りつつ、その内容は上書きして「排除」という手法を採っていることになる。すでにパウロ書簡として広く認知されていたⅠテサロニケ書の存在そのものを排除することは、パウロの死後に突然登場したこの「第2書簡」にとって実質上困難かつ危険に過ぎたのである。だが他方、Ⅰテサロニケ書にはっきりと言及していない以上、単純な「読み方の手引き」として自己主張することも意図してはいない。その場合も、Ⅱテサロニケ書が偽書であることが露呈する危険はやはり存在したからである。かくして著者は、「間接的修正」という手段に訴えた。

【注】

- (1) 本稿は、2014年9月12-13日に広島女学院大学で開催された日本新約学会第54回学術大会において行った研究発表に基づいている。なお、本稿の英語版が、日本聖書学研究所欧文紀要 *Annual of Japanese Biblical Institute* 40 (2014) 49-63に掲載されている。
- (2) 井上大衛「テサロニケの信徒への手紙二」、大貫隆・山内眞監修【新版総説新約聖書】日本キリスト教団出版局、2003年、280-290: 290頁。
- (3) 多くの解釈者がこの立場。例、U. Schnelle, *Einleitung in das Neue Testament* (UTB 1830; Göttingen: V&R, 2011), 366-367; G. タイセン【新約聖書——歴史・文学・宗教】(大貫隆訳、教文館、2003年)、196-197頁、松永晋一【テサロニケ人への手紙】(日本基督教団出版局、1995年)、218頁。
- (4) A. Lindemann, "Zum Abfassungszweck des Zweiten Thessalonicherbriefes," in: idem, *Paulus, Apostel und Lehrer der Kirche* (Tübingen: Mohr Siebeck, 1999), 228-240 (urspr.: *ZNW* 68 [1977] 35-47).
- (5) A. Hilgenfeld, "Die beiden Briefe an die Thessalonicher", *ZWTh* 5 (1862) 225-264: 249-251; H. J. Holtzmann, "Zum zweiten Thessalonicherbrief," *ZNW* 2 (1901) 97-108: 105-106. 近年の支持者としては、W. Marxsen, *Der zweite Thessalonicherbrief* (ZBK NT 12; Zürich: TVZ, 1982), 28; G. Lüdemann, *Die größte Fälschung des Neuen Testaments: Der zweite Thessalonicherbrief* (Springer: zu Klampen, 2010), 56-57; F. Laub, "Paulinische Autorität in nachpaulinischer Zeit (2 Thes)," in: R. F. Collins (ed.), *The Thessalonian Correspondence* (BETHL 87; Leuven: Leuven University Press/ Peeters, 1990), 403-417; 田川建三【新約聖書 訳と註】4 (作品社、2009年)、810-811頁などが挙げられる。
- (6) Schnelle, *Einleitung* (注3), 367.
- (7) H. Roose, "Polyvalenz durch Intertextualität im Spiegel der aktuellen Forschung

- zu den Thessalonicherbriefen," *NTS* 51 (2005) 250-269: 269.
- (8) タイセン【新約聖書】(注3)、197頁。
  - (9) E. Reinmuth, "Der zweite Brief an die Thessalonicher," in: N. Walter et al., *Die Briefe an die Philipper, Thessalonicher und an Philemon* (NTD 8/2; Göttingen: V&R, 1998), 157-202: 161; B. D. Ehrman, *Forgery and Counterforgery: The Use of Literary Deceit in Early Christian Polemics* (New York: Oxford University Press, 2013), 169; Roose, "Polyvalenz" (注7), 269.
  - (10) 拙著【偽名書簡の謎を解く: パウロなき後のキリスト教】(新教出版社、2013年)、82-91頁。
  - (11) なお、Ⅰテサロニケ書の一体性については、これを疑う議論があり、中でも5:1-11を後の挿入と見なすG. Friedrich, "1. Thessalonicher 5,1-11, der apologetische Einschub eines Späteren," *ZThK* 70 (1973) 288-315は我々の議論にも深く関わる(学会席上における青野太潮氏からのご指摘による。同「新約釈義第一コリント書」12、「福音と世界」2015年3月号79-71頁: 74頁注23で青野氏はFriedrich説を強く支持している)。しかしFriedrichが挙げているこの段落の特異性や、他の段落および他のパウロ書簡との相違・矛盾はいずれも、伝承の援用や、初期パウロと後期パウロとの相違によって説明できるものであるし、指摘自体に賛成できないものも含まれている。したがって以下では——T. ホルツ【テサロニケ人への第一の手紙】(EKK XIII)、大友陽子訳、教文館、1995年、27-28頁と共に——Friedrichの説は考慮に入れないものとする。その他の挿入・分割仮説についてはSchnelle, *Einleitung* (注3), 65-66などを参照。Ⅰテサロニケ書の一体性は今日広く認められている。
  - (12) 20世紀初頭までの研究史については、E. von Dobschütz, *Die Thessalonicher-Briefe* (KEK 10; Göttingen: V&R, 1909), 31参照。その後の議論については、例えばA. J. Malherbe, *The Letters to the Thessalonians* (AB 32B; New York et al.: Doubleday, 2000), 349; C. R. Nicholl, *From Hope to Despair in Thessalonica: Situating 1 and 2 Thessalonians* (SNTSM 126; Cambridge: CUP, 2004), 4-13などに記述がある。
  - (13) 例外的にV. P. Furnish, *1 Thessalonians, 2 Thessalonians* (Abingdon New Testament Commentaries; Nashville, TN: Abingdon, 2008), 131-137は、真筆説をめぐる議論を批判的に吟味し、Ⅱテサロニケ書を偽書と見なすことが必要だと主張することはできないが、諸々の論点は偽書説を強く支持していると述べ、偽書説に立って注解を行なっている。またB. J. Malina/ J. J. Pilch, *Social-Science Commentary on the Deutero-Pauline Letters* (Minneapolis, MN: Fortress, 2013), 53-54もⅡテサロニケを偽書と見なす。
  - (14) von Dobschütz, *Thessalonicher-Briefe* (注12), 31-47; K. Staab, "Die Briefe an die Thessalonicher," in: idem/ J. Freundorfer, *Die Thessalonicherbriefe, die Gefangenschaftsbriefe, die Pastoralbriefe* (RNT 7; Regensburg: Friedrich Pustet,

<sup>3</sup>1959), 5-63: 8-10; M. Dibelius, *An die Thessalonicher I-II. An die Philipper* (HNT 11; Tübingen: Mohr, <sup>3</sup>1937), 57-58; W. G. Kümmel, *Einleitung in das Neue Testament* (Heidelberg: Quelle & Meyer, <sup>21</sup>1983), 228-231 のような古い世代では、ドイツ語圏でも真筆性擁護の意見が見られる。

- (15) 拙著『偽名書簡』(注10)、71頁参照。導入部(Ⅱテサ1:1-3)および最後の挨拶(3:18)は明らかにⅠテサロニケ書を模倣したものだし、短い単語レベルの一致にとどまらず、「労苦と骨折れ……夜も昼も働いた、あなたがたの誰にも負担をかけないように」(3:8。Ⅰテサ2:9参照)といった長い表現の一致さえも見られる。
- (16) P. Metzger, *Katechon: II Thess 2,1-12 im Horizont apokalyptischen Denkens* (BZNW 135; Berlin/New York: Walter de Gruyter, 2006), 80の指摘に賛成。
- (17) この部分に限って独自の言葉づかいをしているという事実は、Ⅱテサロニケ書の主たる関心が終末の問題にあったことを示している(Marxsen, *2 Thess* [注5], 29)。対応関係については、*ibid.*, 18-28 および Schnelle, *Einleitung* (注3), 362-363を参照。Schnelleの示す対応表からは、構造上の一致も顕著な両書簡の中で、Ⅱテサ1:5-10と2:1-12がその対応関係からはみ出していることもわかる。
- (18) 他の重要な相違点も含めて、拙著『偽名書簡』(注10)、71-75頁参照。
- (19) E. Best, *A Commentary on the First and Second Epistles to the Thessalonians* (BNTC; London: Black, 1972), 55は、Ⅰテサ5:1が言う「時と時期」(どちらも複数形)とは、(終末に先立つ)一連の出来事の「時と時期」を指しており、それはⅡテサ2:1以下が読者に想起させている事柄と一致しているとする。Malherbe, *Thessalonians* (注12), 368は、Ⅰテサ4:15, 17また5:1-5でもパウロは、再臨が自分の生きている間に、突然来るとは言っているものの、それがさし迫っているとは述べていないと主張するが、説得的とは言えない。
- (20) 田川建三『書物としての新約聖書』(勁草書房、1997年)、191頁および拙著『偽名書簡』(注10)、64-65頁参照。ただし‘correctione’を‘correctione’でなく‘correptione’と訂正して読むなら、「譴責」[宮谷訳]か。テキストはTh. Zahn, *Geschichte des neutestamentlichen Kanons*, II. Band 1. Hälfte (Erlangen/Leipzig: A. Deichert, 1890), 7。
- (21) その他の内容的相違として、Malina/Pilch, *Deutero-Pauline Letters* (注13), 53-54は、イエスが天使たちと共に来臨するという考え(Ⅱテサ1:7)は、天使を危険な勢力ないし敵対する勢力として描くことの多いパウロの用法(ローマ8:38; Ⅰコリ4:9, 6:3; ガラ1:8)に馴染まないと言う。
- (22) Lüdemann, *Fälschung* (注5), 54。
- (23) Metzger, *Katechon* (注16), 76-77。
- (24) Metzger, *Katechon* (注16), 80; Lüdemann, *Fälschung* (注5), 54。
- (25) Metzger, *Katechon* (注16), 80. Nicholl, *From Hope* (注12), 10 n. 35は(E. R. Richards

に倣って)、1人称単数を用いている5:27がこれに該当すると言うが、パウロ自身による挨拶とはだいぶ趣が違う。

- (26) Lüdemann, *Fälschung* (注5), 55; B. D.アーマン『キリスト教の創造——容認された偽造文書』(津守京子訳、柏書房、2011年)、128-129頁。
- (27) Ch. A. Wanamaker, *The Epistles to the Thessalonians: A Commentary on the Greek Text* (NIGTC; Grand Rapids, MI: Eerdmans, 1990), 37-45。この説はすでにTh. W. Manson, “St. Paul in Greece: The Letters to the Thessalonians,” *BJRL* 35 (1952-53) 428-447: 436-447に見られるが、Manson自身はこの立場をHugo Grotius (1641)に遡らせている(*ibid.*, 436)。
- (28) Roose, “Polyvalenz” (注7), 269は、この点の考慮が従来不十分であったと言う。
- (29) 完了形ἐπέστεικενを、「既に来てしまった」(新共同訳)ではなく(Nicholl, *From Hope* [注12], 115-117に反対)、「差し迫っている」(bevorstehen)と解するのが適切であることについては、Ph. Vielhauer, *Geschichte der urchristlichen Literatur* (GLB; Berlin/New York: Walter de Gruyter, 1975), 94 および田川『新約聖書』(注5)、629頁参照。
- (30) 3つ全てにかかると見るのは、古くはvon Dobschütz, *Thessalonicher-Briefe* (注12), 266; J. E. Frame, *The Epistles of St. Paul to the Thessalonians* (ICC; Edinburgh: T&T Clark, 1912), 246-247(諸説と古代以来の支持者の紹介あり)。最近ではMalherbe, *Thessalonians* (注12), 417。邦訳では、フランシスコ会訳だけがこの立場を採っている。
- (31) Laub, “Autorität” (注5), 406。
- (32) Lindemann, “Abfassungszweck” (注4), 230。ほとんどの邦訳聖書はこの立場。
- (33) Ehrman, *Forgery* (注9), 169に反対。
- (34) したがって、発信者名が揃えてあることはⅡテサロニケ書の戦略の一つなのであり、「我々」はいわゆる著者の複数。つまり建前上の著者個人(パウロ)を指す」という田川『新約聖書』(注5)、627頁の説明は不正確だと思う。
- (35) 拙著『偽名書簡』(注10)、87頁。Wanamaker, *Thessalonians* (注27), 239が、真正パウロ書簡としてすでに長く知られていたⅠテサロニケ書を偽物扱いするためには、ここで対象を明確化する必要があったはずだと述べているのは、それ自体正しい。
- (36) このὡς δι’ ἡμῶνという表現は、2:15との対応関係(後述)を考慮すれば、その手紙が偽物であることを示唆している可能性が高いが、表現が曖昧なので、「(実際に)私たちによる」と訳せないこともない(W. Trilling, *Der zweite Brief an die Thessalonicher* [EKK XIV; Zürich/Neukirchen-Vluyn: Benziger/Neukirchener, 1980], 75-76参照)。この曖昧さもまたおそらく意図的なものである(H. Roose, “‘A Letter by Us’: Intentional Ambiguity in 2 Thessalonians 2.2,” *JSNT* 29 [2006] 107-124)。

- (37) Best, *1-2 Thessalonians* (注19), 279; E.-M. Becker, "ὡς δι' ἡμῶν in 2 Thess 2.2 als Hinweis auf einen verlorenen Brief," *NTS* 55 (2009) 55-72 は、ここで意図されているのはIテサロニケ書ではなく別の失われた書簡だと主張するが、それがまさしく著者の戦略に適った「読み」なのである。
- (38) 拙著『偽名書簡』(注10)、88-89頁。
- (39) Ehrman, *Forgery* (注9), 169; Trilling, *2 Thess* (注36), 128-129; Dibelius, *1-2 Thess* (注14), 51など。
- (40) Marxsen, *2 Thess* (注5), 35-36。また、Lindemann, "Abfassungszweck" (注4), 230; Lüdemann, *Fälschung* (注5), 58 など、「排除説」を探る解釈者のほとんどがこの立場(Trilling, *2 Thess* [注36], 128 Anm. 546 がLindemannを(1)に入れているのは誤り)。またMarxsenは(1)の可能性も考えている(*ibid.*, 11)。
- (41) Reinmuth, "2 Thess" (注9), 184 (ただし同162頁によれば、フィクションのレベルで「手紙」が意味しているのはIテサロニケ書だが、現在の読者に対しては、パウロの使信が手紙で伝えられていること全般を指しており、その場合はIテサロニケ書に限定されるものではないと言う); Trilling, *2 Thess* (注36), 129: "das Ganze der christlichen Wahrheit und Lehre umgreifend"; 田川『新約聖書』(注5)、640頁。
- (42) IIテサロニケ書の著者はIテサロニケ書以外のパウロ書簡をも知っていた。3:17に関する後述参照。
- (43) 「言葉」と「手紙」はいずれも単数形だが、複数ものを包括的に意味していると考えることができる(Marxsen, *2 Thess* [注5], 94)。
- (44) ここからして、IIテサロニケ書の著者がIコリント書を知っていたことはほぼ間違いない。コロサイ書との前後関係は不明だが、「すべての手紙にある」という表現からして、IIテサロニケ書の著者はたぶんコロサイ書も知っていたのであろう。
- (45) P. Metzger, "Eine apokalyptische Paulusschule? Zum Ort des Zweiten Thessalonicherbriefs," in: M. Becker/ M. Öhler (Hg.), *Apokalyptik als Herausforderung neutestamentlicher Theologie* (WUNT 2.214; Tübingen: Mohr Siebeck, 2006), 145-166: 164 が、3:17は(Iテサロニケ書だけでなく)このしるしを持たないパウロ書簡すべてを偽物扱いしていると言うのは、この発言の修辭的效果を考慮しない恣意な解釈だと思う。
- (46) 拙著『偽名書簡』(注10)、90-91頁。

## 辻学著『偽名書簡の謎を解く——パウロなき後のキリスト教』 (新教出版社、2013年)

三 浦 望

本書は、辻学氏が『福音と世界』誌(新教出版社)に2012年4月号から翌年3月号まで十二回にわたって連載した原稿「パウロなき後のキリスト教——第二パウロ書簡の謎」を単行本化したものであり、連載時には参照できなかった文献を追加し、改稿・増補し、2013年に新教出版社から刊行された。

辻氏は、パウロの第二書簡の中でも特に牧会書簡を専門としてきた研究者である。本書の「はじめに」にもあるように、日本の新約聖書研究においてこの分野の研究は極めて手薄であり、第二書簡についてのまとまった研究書がほとんど存在しない。そこで、「新約のどの文書についても詳しい専門的注解書と一般向けの解説書が存在するという状況を作ること、聖書理解の水準は高まるはず」(6頁)という信念に基づき、本書を認めた、と。確かに、海外においては、近年、牧会書簡や公同書簡(後者では特に、ペトロ書とヤコブ書)についての研究が頻繁に取り上げられる傾向にあるが、日本では依然として新約聖書研究は福音書と真正パウロ書簡を中心として展開してきている。本書は、こうした現状に建設的に貢献するために、「一般向けの解説書」を

目指して著されたと言えよう。

同時に、辻氏が第二書簡に惹かれるもうひとつの理由は、第二書簡の著者たちが「普通の信仰者」であるというところにある。宗教的「天才」イエスやパウロと異なり、第二書簡の著者たちは、偉大なる前任者なき後、地理的にも規模的にも拡大・組織化されていく紀元一世紀後半から二世紀前半の「教会」を支えるキリスト教徒である。パウロ思想の担い手として、その多種多様な解釈が出現する中で、継承した思想を自らの共同体の現状で再適応しようと努力している人々である。その姿は、現代のキリスト教徒であるわれわれの在りようと重なり、「教会」を受け継ぐ同志のように近い存在として感じられるのは事実であろう。

本書が一般的な解説書であるかということ、実はそうではない。本書のタイトルにあるように、この著作は「謎解き」を中核として構成されている。つまり、第二書簡の著者たちが、「なぜ」このような書簡を、しかも「偽名」を使ってでも書かねばならなかったのかという、いわゆる「執筆意図」を含む著者問題を中心に解説されるのである。それが、本書では推理小説を読むような「わくわく感」